

## 《卒業研究報告》

## 若年男性は結婚の価値をどう考えているのか

## —インタビュー調査を通して—

舟山 京佑 (本多ゼミ)

## 序章 はじめに

日本は世界的に見ても少子高齢化が特に進行している国であり、内閣府の令和4年版高齢社会白書によると、日本の総人口1億2550万人に対して65歳以上人口の割合は3621万人（2021年10月1日時点）であり、高齢化率は28.9%と極めて高い。（内閣府 2022a）。

この高い高齢化率を生み出す要因は様々あるが、その中でも「少子高齢化」として同等に扱われている少子化問題によるものは大きいだろう。内閣府の調査では0~14歳の年少人口は1478万人（2021年時点）となった（内閣府 2022b）。

なぜ、このような数値が出るほど子どもの数が減っているのだろうか？とりわけ考えられることは、結婚はもとより、恋愛も難しくなっているということだ。学生時代に交際経験が一度もないという人も増えていると言う。

また、結婚の話題になると必ずと言っていいほど出てくるのが金銭面での話だ。特に男性はこれまでの社会で、家族を養っていかなければならない立場にあったため、より一層そのように考える人も多いことが考えられる。

だが、今では女性の社会進出も進んだことで男性稼ぎ手モデルから新しい形に変わってきている。男性が一家の大黒柱になるのではなく、共働きをする家庭が増えてきており、そういった点では金銭面での心配というところは以前よりも無くなってきているのではないだろうか。

しかし、14歳以下の年少人口は65歳以上人口の

半分にも満たず、総人口の割合では11.8%と低い数値だ。2020年の合計特殊出生率は1.33であり、出生数は過去最低の84万835人であり、少子化は今後も下がっていくと考えられている。ならば、結婚や子どもを持つことの現状には上記以外の何らかの障害があるのではないだろうか。

そこで私は、20代前半の若年男性を対象に、結婚観や子どもに対しての意識などの部分についてインタビュー調査を行った。本論では、そちらの調査結果から若年男性の結婚や子どもを持つことに対するリアルな考えを見ていく。また、そこから若年男性の結婚を取り巻く社会の状況を考察していきたい。

## 第一章 先行研究及び問いの設定、調査概要

## 第一節 先行研究

女性や中年男性の結婚事情に関する先行研究はいくつかあるが、若年男性の結婚事情に関する先行研究というところではあまりない。

女性の結婚事情については、府中明子による研究結果がある。府中は20代後半から30代前半の未婚女性五名へのインタビュー調査の結果から、未婚女性がなぜ結婚をしないのか、また、できないのか、といった部分を考察している。

府中は、女性が結婚相手を選ぶうえで重要視している箇所が三点あるとした。一つ目は恋愛感情であり、二つ目は経済的側面、三つ目は子どもに対する態度や意識だという。

以上の三点を踏まえて府中は女性の結婚観について、夫婦となる二者間ではなく、子どもも含めた三者間以上の生活で考えられていると述べた(府中 2016)。この研究結果を踏まえて、本論では若年男性と女性での考え方の違いや双方からの視点で見えてくる結婚の価値について考えていきたい。

高山憲之は中年未婚男性の生活実態や結婚への意識について、40歳以上の未婚男性を対象とした世代間問題研究プロジェクト「くらしと仕事に関するインターネット調査」(2011年)の調査結果から明らかにしている。高山によれば、多くの中年未婚男性に共通している点として、親と同居している点、非正規職や失業中、無職が多いという点などが出てきた(高山 2016)。

だが、注意すべき点として、この結果は2011年と10年以上前に行われている調査の結果をもとにしているため、当時と現代の未婚男性への考え方の違いや変化の流れなどについても見ていきたい。

また、若者の恋愛事情に関しては、牛窪恵がまとめている。牛窪によると、若者にとって恋愛は趣味の中のひとつでしかなかったと述べる。

牛窪が若者の恋愛離れの要因にインターネットの普及とともに指摘している点として、現代の若者が感じている恋愛の「重さ」がある。

また、若者にとって、親は唯一の絶対的に信頼できる存在だと言う。恋人と違い、親には何でも好きに話せることや出費が少なくて済むことから、恋愛よりも親との時間が優先されていると牛窪は考える。結果としてそれが若者の恋愛感情や性的意識を封じ込めているとも指摘している(牛窪 2015)。

ここまで若者の恋愛離れについて話されてきたが、結婚になると話は変わる。多くの若者が結婚はしたいと考えているのだ。

以上の内容を踏まえて、本論では若年男性へのインタビュー調査結果から家族との関係性や恋愛への考え方といった部分が、牛窪が指摘したように関連性があるのか、また、恋愛に消極的になっているのかといった部分を明らかにしていきたい。

これらの先行研究では、若年男性の結婚観の部分は明らかにされてきていない。本論では、若年男性の結婚観といった部分について調査し、明らかにしていきたい。

## 第二節 問いの設定

本論では、20代前半の若年男性が結婚をどのように考えているか、子どもを持つことや育児に対してどう考えているのか、そもそも結婚願望はあるのかといった部分をインタビュー調査の結果から考察していくものである。

先行研究では女性が男性に経済的安定を求めていると指摘されていたことから、結婚願望はあるが経済面で安定していないと結婚はできないと考えられているのではないと思われる。また、子どもを持つとなると経済面の安定が更に求められるため、子どもを持つことには消極的になっていることが考えられる。以上の仮説をもとに、若年男性の持つ結婚観というところを明らかにしていきたい。

## 第三節 調査概要

### 第一項 調査手法の設定

調査手段として、今年22歳になる男性6名を調査対象としたインタビュー調査を用いる。インタビューについては調査に同意を得た後、今年の8月～9月中に個別に半構造化されたフォーマルインタビューを実施した。許可を得て音声録音し、

後日に書き起こしを行った。

## 第二項 インタビュー対象者

以下の男性6名にインタビュー調査を行った。

Aさん（22歳、社会人、恋人なし）

Bさん（22歳、大学生、恋人なし）

Cさん（22歳、専門学校生、恋人なし）

Dさん（22歳、大学生、恋人あり）

Eさん（22歳、大学生、恋人あり）

Fさん（22歳、大学生、恋人あり）

## 第二章 調査結果

### 第一節 結婚願望と結婚後の生活についての意識

結婚願望について、今回の調査では、「将来結婚したいか」という質問に対して、「したい」と言い切った回答を三人がしている。また、「どちらかと言えばしたい」のような回答を二人、「支えあえるパートナーを作る方法のひとつとして結婚はあり」という回答を一人がしている。

この結果から、全員が結婚願望を持っていることがわかる。しかし、願望の強さや結婚の価値観といった部分には人によって違いが見られた。

結婚した際に子どもを持ちたいか？という質問には「持ちたい」と言い切った回答が三人、「どちらでもいい」といった回答が一人、「今は持ちたいと思わない」といった回答が二人であった。

回答結果では、子どもを持つことに対して完全に否定している回答はなかったことから、子どもを持つことに消極的にはなっていないことが考えられる。

### 第二節 相手との育児のバランスについて

男性も子育てに参加した方がいいと思うかという質問には回答者全員が「参加した方がいいと思う」と回答した。

回答は、最終的には男性稼ぎ手モデルの形になっていくことが考えられている。このことから、

子育ての中心は女性に任せたいと考えているようだ。

子育ての際に女性にどういったことを求めるかという質問からは、女性に対して専業主婦や働くことを求めていること、保育園や幼稚園などの託児所を使うつもりでいることが全員に共通している。また、「相手の好きなことをしてほしい」との回答も見られた。

相手の女性に求めることとしては、「仕事よりも育児を優先してほしい」という回答など、育児の面では女性が中心になってほしいと考えられていることがわかる。また、「特に何も求めない」という回答もあったが、この回答は女性中心で子育てしてほしいという意識と矛盾している。この矛盾が、若年男性が考えている子育てへの理想と現実なのではないだろうか。

### 第三節 結婚及び子育てを取り巻く社会の状況

今の社会は結婚及び子育てがしやすい社会だと思うかという質問には、結婚に関しては、制度の面ではしやすくなっているが、結婚意欲は低下しており、結婚したい人は減っているのではないか、という内容であった。

次に、子育てのしやすさについては「金銭面」と「仕事との両立をする環境」が十分ではないことから、子育てはしにくいのではないかという内容であった。

子育てについて、改善してほしい点はあるかという質問には、育休の取りやすさについて、保育園や幼稚園などの託児所について、経済支援について改善してほしいと回答した。

少子化について真剣に考えたことはあるかという質問には四人が「考えたことはない」と回答した。

結婚するなら何歳までにしたいかという質問には四名が30歳前後と回答した。

ここまでの回答結果として、結婚に関しては制

度としてしやすくなっているが、結婚意欲は少なくなってきたと考えられていることが分かった。また、子育てに関しては、経済面や仕事との両立の難しさといった点から子育てしにくいと考えられている。

この結果から、仕事の面では女性の社会進出によって男女平等が進んでいるが、子育てに関しては男女平等にはなっていないことが見えてくる。

#### 第四節 恋愛活動と趣味、家族との関連性

家族仲についての質問では全員が「良好」と回答した。だが、今後も家族に頼って生活をしていくような考えはなく、全員ひとり立ちしたいと回答した。

友人、家族、恋人の優先順位についての質問では家族よりも恋人や友人のほうが優先されている結果になった。

両親のような関係性は理想的かという質問には「理想的」「理想的ではない」「理想的な部分もあるがそうじゃない部分もある」とそれぞれ2人ずつ回答した。

性的な物事に嫌悪感を持つかという質問には、全員が「ない」と回答した。

恋愛よりも優先される趣味はあるかという質問には3人が「恋愛優先」2人が「趣味優先」1人は「趣味を優先したいが恋愛優先になっている」と回答した。

家族と恋愛活動の関連性について、先行研究で言われているような回答は見られなかった。

趣味と恋愛活動の関連性については、それぞれを同等に考える回答が見られた。恋愛よりも自分の趣味のほうが「コストパフォーマンス」が良いと考えられている。そのような考えが広まり、結婚をしない人の見られ方も変わってきている。高山が調査をした時と比べて、「未婚」に対して肯定的な見られ方も増えているのではないか。未婚男性の実態が、高山の調査時と現在で大きく変

わっているように考えられる。

#### 第五節 結婚の価値及び意味

結婚のメリットとデメリットはなにかという質問では、メリットとして、「子どもが持てる」「一生を共にしてくれる存在ができる」「法的にもしっかりした関係性になる」などがあつた。

デメリットとして、「お金がかかる」「手続きの面倒臭さ」「自分の好きに使える時間とお金が減ること」「家族を養う責任があるから転職などがしにくい」などがあつた。

子どもを持つことのメリットとデメリットはなにかという質問では、メリットとして5名が「子どもがいるだけで幸せ」と回答した。

デメリットには「お金がかかる」「自分の時間が減る」と回答した。

メリットに具体的な回答が出てこなかったのに対して、デメリットとしては複数の具体的な回答が出されたことから、若年男性にとって子どもを持つことはリスクが高くなっていることが考えられる。

結婚は恋愛の延長線上であるべきものだと思うかという質問には回答者全員が「そう思う」と回答した。

回答結果から、今後も恋愛結婚が主流であることは変わらなさそうな結果ではあつた。だが、今回の調査結果でも経済面についての回答が多く出たことから、結婚するには恋愛感情があり、経済的にも結婚できるという二点が満たされていないと結婚できないと考えられている。

また、結婚のメリットとして挙げられている「一生を共にしてくれる存在ができる」は事実婚の状態でも当てはまる。結婚だけに当てはまる回答は「子どもが持てること」と「法的にしっかりした関係性になること」のみになる。今後、制度がより充実していけば、「法的にしっかりした関係性になること」も結婚だけに言えることではなくな

る可能性も考えられる。そのようになっていった場合、結婚する理由は「子どもを持つため」以外には無くなっていくのではないだろうか？

### 考察

以上の調査結果から、私が提示していた仮説との対応を見ていく。仮説として、先行研究で府中が女性は経済的安定を求めていると指摘していたように、男性も結婚願望はあるが経済的に安定していないと結婚はできないと思っているのではないかと考えた。

調査結果では、回答者全員が結婚願望はあると回答している。また、結婚のデメリットを聞いた際に「お金がかかる」と回答しているのは一人だけだ。この調査結果からは、若年男性は結婚するうえで経済的安定をそこまで気にしていないことがわかる。

では、なぜそのような結果となったのかを考えていく。「結婚した際は相手の女性にどんなことを求めるか」の質問には「相手と家事や育児を分担していきたい」という回答があった。ここでは「家事をやってほしい」ではなく、「分担したい」であり、相手に専業主婦になってもらいたいとは思っていないことがわかる。となると、必然的に共働きで考えていることが見えてくる。そのため、若年男性は結婚する際には経済的安定をそこまで気にしていないのではないだろうか。

共働きが前提と考えられている要因として、今回の回答者全員が両親共働きの家庭で育あり、それをモデルとして見ていることが考えられる。この結果から、「経済的安定がないと結婚できないと考えているのではないか」と言う私の仮説は間違っていたことになる。

では次に、「子どもを持つとなると経済面の安定が更に求められるため、子どもを持つことには消極的になっているのではないか」という仮説との対応を見ていく。育児や子どもを持つことの部

分では、経済面についての回答が多く出てきた。回答者が育児で難しいと考えている点は「仕事との両立」「養育費や学費などの経済面」などであった。経済面を安定させるために働かなければいけないが、育児と仕事の両立が難しいというようにこれらはつながっていることが考えられる。育児についての質問で経済面の回答が増えたことは、この二つの問題が関連しており問題意識が強まったのではないか。また、「男性は一家の大黒柱ならなければいけない」という意識がまだ持たれている」という回答もあった。家族が増えることでその考えが強まり、より経済面の安定を求めるようになることも考えられる。また、子どもを出産直後は女性は働くことが難しく、その期間を問題なく生活するためにも、男性の経済面の意識が強まるのではないだろうか。

だが、経済面が原因で子どもを持つことに消極的になっているわけではない。「子どもを持ちたいか」という質問の回答では、リスクはあると考えている回答はあったが、子どもを持つことを完全に否定している回答はなかった。また、この質問に「持ちたい」と回答した2人は「子どもを持つことのデメリット」として、「お金がかかる」と回答している。このことから、子どもを持つと経済的に厳しくなることを理解したうえで子どもを持ちたいと考えているということがわかってくる。

私の仮説は「子どもを持つとなると経済面の安定が更に求められるため、子どもを持つことには消極的になっているのではないか」というものであった。確かに、子どもを持つと経済的な安定が必要になると考えているが、それが理由で子どもを持つことに消極的にはなっておらず、それを理解したうえで子どもが欲しいという回答結果であった。

では、ここからは調査結果から見えてくるものを考察していく。見るものは若年男性の考える「結

婚の価値」だ。回答の中で、「結婚しないとできない生活は子どもがいる生活くらい」とあり、結婚は子どもを持つこと以外に「価値は無い」と考えられている。「結婚のメリット」として挙げられている「一生を共にしてくれる存在ができる」という回答は、結婚せずとも事実婚の状態で達成でき、もう一つメリットとして挙げられている「法的にしっかりした関係性になれる」についても、今後パートナーシップ制度が改善されていけば結婚だけに言えるものではなくなるという回答があった。そうすると、結婚しないとできない生活は指摘されているように「子どもが持てる」生活しなくなるのではないだろうか。

次に、育児に対する意識の部分を見る。「男性も育児に参加したほうが良いと思うか」という質問には全員が「そう思う」と回答しているが、「現実的には仕事との兼ね合いによる」という回答も多く出た。また、「最低限以上は気持ち次第」という回答からは、育児は男性もしなくては行けないものであるとは考えられていないことが見えてくる。この結果から、「男性も育児に参加したほうが良い」とは思っているが、現実的には仕事の両立が難しいため相手の女性に任せたいと考えている。それに対して、「育児の際に女性に求めることは何か」という質問には「特にない、相手の好きにしてほしい」という回答があった。しかし、本音の部分では女性に育児は任せたいと考えているため、この回答は矛盾している。これらの回答は「相手の好きにしてほしい」は理想の部分、「育児は女性に任せたい」は現実の部分というように、若年男性の育児に対する理想と現実が現れているのではないか。

また、この育児に対する若年男性の考え方は他の部分にも矛盾がある。それは共働きをしているという点である。上記のように、若年男性は結婚において共働きを前提に考えている。だが、女性に育児も求めるとなると、女性側でも仕事との両

立の難しさに悩まされるはずだ。しかし、その部分については今回の調査内では触れられていない。もしかしたら、女性も仕事との両立が難しくなるということは理解されていない可能性が考えられる。

そして、この矛盾はまだある。性別役割分業に対する考え方だ。今回の回答者は共働きを想定していることから、性別役割分業の形を肯定していない。だが、育児は女性に任せたいという意識の部分は性別役割分業のものだ。このことから、若年男性は性別役割分業の形は否定しているが、考え方の部分は持たれ続けているという結果になるのではないか。

## 終章 結論

今回の調査結果から、若年男性の結婚観といった部分を少し明らかにしていくことができた。

また、結婚が子どもを持つため以外価値がないと考えられていることなど、若年男性の持つ結婚に対するリアルな考えの部分も明らかにすることができたのではないだろうか。

また、今後の課題としては今回の調査は回答者6人と少なく大学生が多かったため、社会人などのより幅広い層の多くの若年男性を対象とした調査を行っていく必要がある。また、今回の調査では回答者全員が結婚願望が「ある」と回答しているため、結婚願望の「ない」若年男性への調査も行うことで今回の調査結果では見られなかったような新たな視点が生まれる可能性が考えられる。

引き続き、若年男性の結婚観について注目し、調査を続けていく必要がある。

### 参考文献

- 牛窪恵、2015、「恋愛しない若者たち コンビニ化する性とコスパ化する結婚」デイスカヴァー携書。
- 高山憲之、2016、「『くらしと仕事に関するインターネット調査』からみた 中年未婚男性の生活実態と意識：調査結果の概要」(ja (jst.go.jp)2022年4月5日アクセス)。
- 内閣府、2022a、「高齢社会白書 令和四年版」サンワ。
- 内閣府、2022b、「少子化社会対策白書 令和四年版」日経印刷。
- 府中明子、2016、「恋愛結婚の条件——首都圏に暮らす未婚女性へのインタビューから——」『家族研究年報』41：41-57 (en (jst.go.jp)2021年12月5日アクセス)。
- 山田昌弘、1996、「結婚の社会学——未婚化・晩婚化は続くのか」丸善ライブラリー。